

現代の若者の「つながり」志向(2) — 「希薄化」論の再考 —

Human relation of the youth

田畑 和彦
Kazuhiko TABATA

(平成29年10月3日受理)

現代の若者は豊かな社会に身を置いているとはいえ、彼ら彼女らを取り巻く環境は決して良いとは言えず、むしろそれは暗い影を落とし、若者から希望を奪っていたのだが、それでも現代の若者たちは現在の生活に満足しているのであり、それは「精神的充実」からもたらされるものであった。すなわち「家族、恋人、友人」など、人とのつながりが現在の生活を満足へと導いていたのである。人とのつながりが精神的豊かさを用意していた。

若者に関しては友人関係の希薄化が指摘されていたが、データはそれを示しておらず、むしろ現代の若者の人間関係は希薄化というよりも、逆にある種の濃密化と考えた方が適切のように思われる。関係の深浅に合わせ、それを壊さないだけの能力が求められるのもそのためである。今若者たちは人間関係を希薄化させているどころか、どの世代よりも関係に敏感で繊細になっている。それは彼ら彼女らを苦しめるほどである。

問題の限定

人間の行動は当然その思惟にもとづくものであり、その思惟は文化やその時代の状況に影響されるものである。前稿（「現代の若者の『つながり』志向 [1]」）で若者を取り巻く経済・社会環境について考察したのは、まさに現代の若者の意識を捉えるがためのものである。結論としては、今の若者を取り巻く社会・経済環境は非常に厳しく、変わりゆく人口構成からいっても、また非正規化を余儀なくされる雇用状況からいっても、さらには広がりゆく所得格差からいっても、それらは若者に明るい未来を予想させるものではなかった。世界経済における日本のプレゼンスも低下を余儀なくされるなか、現代の若者たちは日本の発展可能性を信じ切れずにいたのである。むしろそれらは阪神淡路大震災や東日本大震災、世界各国で起こるテロ事件、さらには低年齢化する凶悪犯罪などの社会不安と相俟って、若者の意識に暗い影を落としていた。若者は日本の未来に明るい希望を見出せないばかりか、自分の将来に対しても期待できずにいたのである。その数値はアンケートに対する日本人の低い回答傾向を差し引いても看過できるものではなかった。米、英、仏、独、スウェーデン、韓国などと比べても、その差は歴然としていた。

しかし、そのような現状認識、さらには将来への不安があるものの、現在の若者は、現在の生活に高い満足を示していたのである。青春時代をまさに失われた20年のなかで過ご

し、豊かさを享受したとは言えない彼ら彼女らは、現在の生活を否定するどころか、現在の生活に正の評価を与えていたのである。今の生活を肯定的に捉えていた。若者は中高年などと比べ、確かに経済的負担は少なく、ある種身軽といっても過言ではない状態に置かれているが、それだけが理由にも思われない。そこにはもっと積極的な理由があるように思われる。

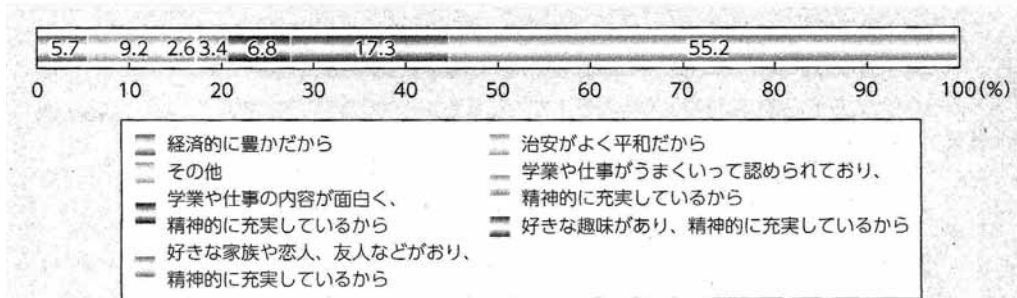
本稿はその理由に迫るものである。今の若者は一体何に満足しているのだろうか。何が彼ら彼女らの現状を肯定させているのだろうか。現在の若者というと、人間関係を希薄化させていると言われるが、そうした事実はあるのだろうか。前稿に引き続き、本稿でも各種先行データを重層的に重ね合わせ、また偏向する各種バイアスを取り除き、若者の真の姿を追い求めることにする。

1. 現状を肯定する理由

(1) 精神的な充実

2013年に実施された「若者の意識に関する調査」は、そうした解を求める我々に一つの手がかりを与えてくれる。そこで明らかにされた現在の若者が現在の生活に満足している理由は「精神的な充実」であった。「経済的豊かさ」をその理由に挙げる者は5.7%と少なく、82.6%の者が「精神的な充実」をその理由として挙げていたのである。現在の生活に精神的な充実感を覚えるが故に、満足している若者の姿をそれは浮き彫りにする。団塊の世代が30歳代であった頃（1980年）は物質的豊かさを重視するものが多かったが、現在の若者は精神的豊かさに充実感を見ている。

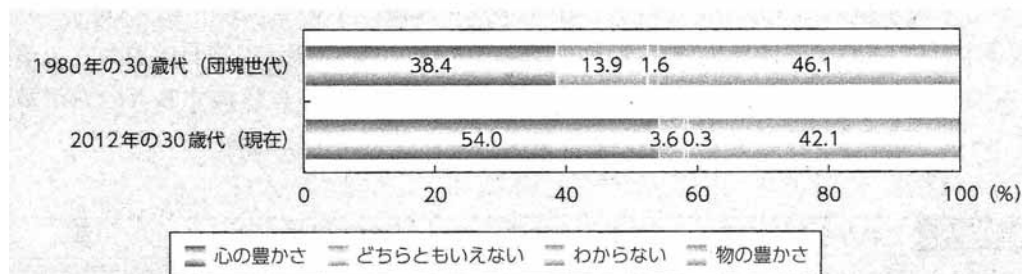
図表 1 生活満足の理由（全体）



資料：厚生労働省政策統括官付政策評価官室委託「若者の意識に関する調査」(2013年)

出所『厚生労働白書』、41頁

図表2 これからは心の豊かさか、まだものの豊かさか（1980年の30歳代との比較）

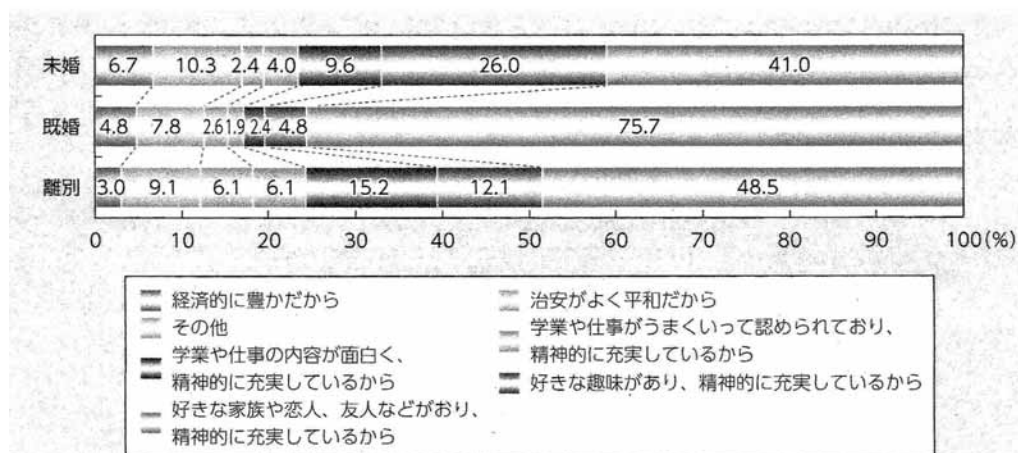


資料：内閣府「国民生活に関する世論調査」

出所『厚生労働白書』、41頁

その内訳は「好きな家族や恋人、友人などがあるから」と答えた者が全体の55.2%と最も多く、それに「趣味」の17.3%や「仕事」の6.8%が続く。しかし、それら二者よりも「家族や恋人、友人」など、身近な人との付き合い、言うなれば愛情の感得とそれを含むつながり実感が現在の若者にとっては最大の満足となっていることが伺える。未既婚別にそれを見ると、既婚者のそれはさらに高く、75.7%の者が「好きな家族や恋人、友人」に「生活満足の理由」を求めている。未婚の者でさえ、その数値は「好きな趣味」を超える。

図表3 生活満足の理由（未既婚別）



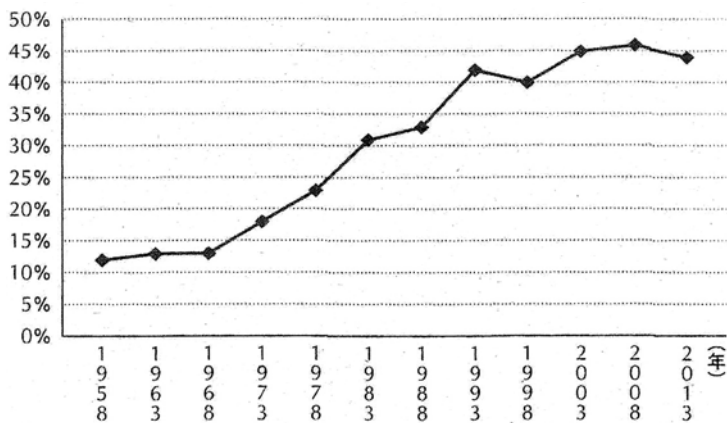
資料：厚生労働省政策統括官付政策評価官室委託「若者の意識に関する調査」(2013年)

出所『厚生労働白書』、43頁

対象を若者に限定せず、日本人一般とした場合でも、日本人の家族関係に対する満足度は概して高いことが伺える¹⁾。1973年から5年ごとに全国の16歳以上の国民を対象に実施しているNHK放送文化研究所の「家族に関する世論調査」(『現代日本人の意識構造』NHK出版)によれば、84%の者が家庭生活に満足していると回答し、家族との時間についても、8割の者が「十分取れている」あるいは「まあ取れている」と答えている。同じNHKによる「社会と生活に関する世論調査」は「職場・学校の同僚や友人」「近隣の人々」「家族」のそれぞれについて「満足している」「どちらかといえば、満足している」「どちらかといえば、不満である」「不満である」の4段階で満足度を尋ねているが、ここでも「家族」に対する満足度の割合は高く、「近隣の人々」が15.4%、「職場・学校の同僚や友人」が19.5%であるところ「家族」のそれは49.3%であった。家族に対する満足度は5割を超えてはいないが、それでも「職場・学校の同僚や友人」を超えるものとなっている。統計数理研究所が1950年代から5年おきに実施している『国民性調査』も同じである。自分にとって最も大切なものとして「家族」を挙げた者は1958年当時には12%と少なく、それは「金・財産」の15%よりも低いものであったが、その後右肩上がりを示し、2013年には微減したものの、近年は半数近くにまで伸びている。

近年は少子化や晩婚化、非婚化、さらには児童虐待が世間を騒がすが、また「防災・エネルギー・生活に関する世論調査」では、必ずしも結婚する必要はないという意見に6割以上の者が賛成し、結婚に関しては「すべきである」という意見は少数派になっているが、それでも家族に対する満足度は以上のように高いのである。

図表4 自分にとって最も大切なものとして「家族」を挙げた人の割合

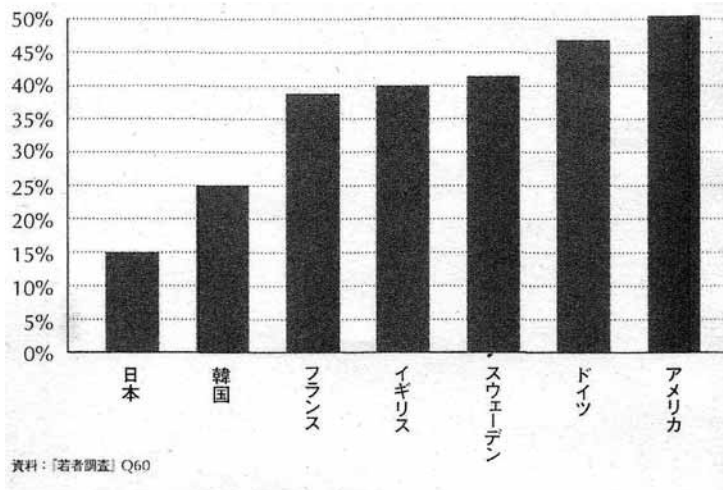


資料：統計数理研究所『国民性調査』、第2回～第13回

出所 鈴木賢志『日本の若者はなぜ希望を持ってないのか』、70頁

しかし、対象を親元で暮らす中高生、すなわち、13歳から17歳に限定し、設問を「家族」ではなく「家庭生活」に変えて、その満足度を「満足」「どちらかといえば満足」「どちらかといえば不満」「不満」「わからない」の5つの選択肢から尋ねると、「満足」とする回答は全体の15%にとどまり、その数値は諸外国と比べると²⁾最下位である。それでも「どちらかといえば満足」の数値を加えれば、日本の中高生の家庭生活に対する満足度は6割に達するが、「満足」のみで51%、「どちらかといえば満足」を加えれば84%に達するアメリカの足元にも及ばない。しかしそれでも家族は現在の若者にとっては現状を肯定する要因の一つに位置づけられている。

図表5 家庭生活に「満足」という若者（13～17、未婚）の割合

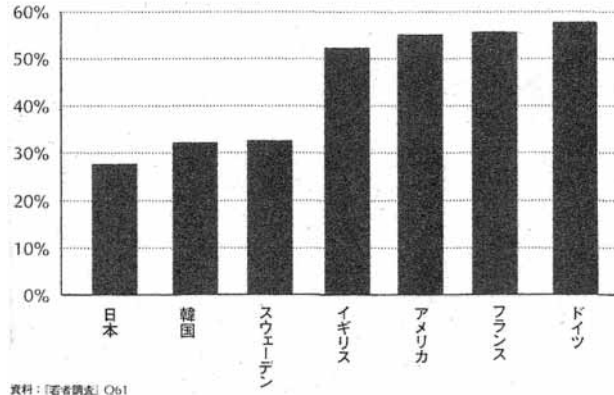


出所 鈴木『日本の若者をなぜ希望を持ってないのか』、73頁

ちなみに、統計から浮かび上がる原因は親の愛情への不満足である。「親の愛情に満足しているか否か」の2013年の『若者調査』では日本のそれは28%と最下位である。首位であるドイツの58%の半分にも及ばない。「家庭内で争いごとがないことに満足している」と回答した若者（13歳から17歳）も30%もないことから、家庭の在り方そのものに問題があるのかもしれない。親の愛情と子供の希望とは正の相関関係があることが指摘されている故に、この点が改善されれば希望を持つ日本の若者も増えるということである。

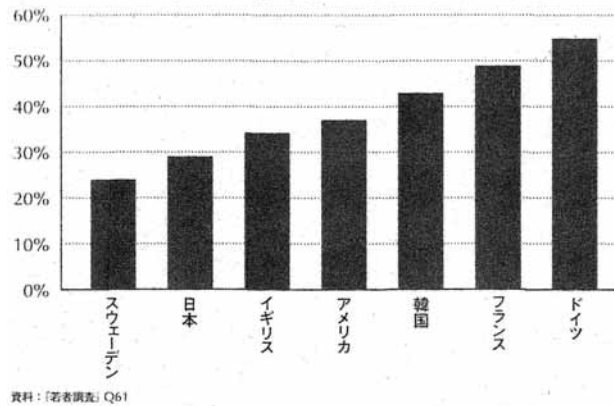
このように、家庭内で争いごとが耐えず、また親の愛情にも不満を持つ青少年が若者の一部を形成しているということは、若者の場合、それを青少年に限ってみると、かなりの割合で、家族ではなく、友人や恋人に精神的な充実感を得ているということである。そういう層がいるということである。

図表6 親の愛情に満足していると回答した若者
(13~17歳、未婚)の割合



出所 鈴木『日本の若者はなぜ希望を持っていないのか』、78頁

図表7 家庭内で争いごとがないことに満足していると回答した若者
(13~17歳、未婚)の割合



出所 鈴木『日本の若者はなぜ希望を持っていないのか』、77頁

少し古いので、参考程度にしか取り上げられないが、2004年に実施された内閣府の青少年調査を見てみると、やはり「友人や仲間といるとき」に充実感を感じている若者が多いことが伺える。「あなたは、どんなときに充実していると感じますか」との問いに対して7割のものがそれを挙げ、「家族といるとき」や「他人にわずらわされず、一人にいるとき」を大幅に超える。上記指摘を裏付けるかのように「家族といるとき」に充実感を感じると答えた若者は3割に満たない。若者を狭義に捉え、青少年とすると、家族よりも、そして一人にいるよりも、友人関係それ自体に喜びと楽しみを見出す若者の姿が浮かび上がる。

図表8 あなたは、どんなときに充実していると感じますか

(%) (内閣府政策評価官編 2004)

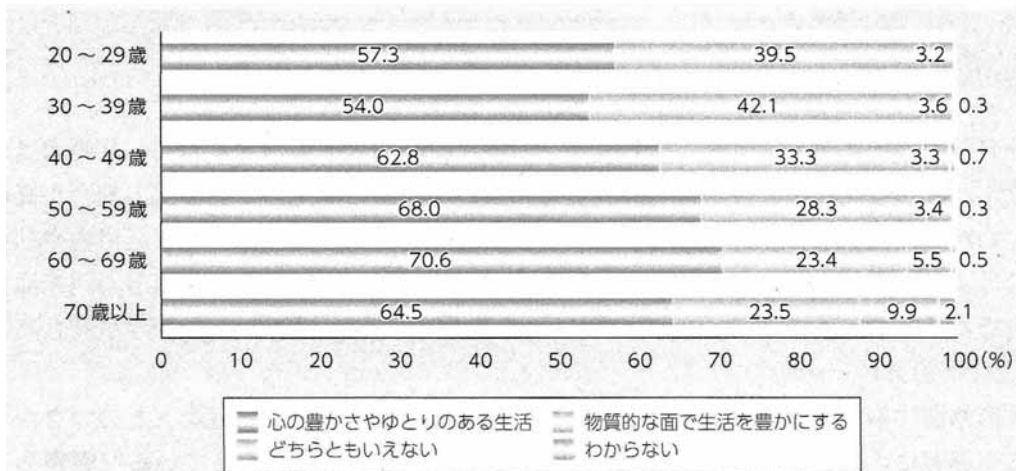
	1983年	1988年	1993年	1998年	2003年
家族といるとき	20.0	21.3	23.5	26.2	27.4
友人や仲間といるとき	59.2	62.0	70.8	74.0	72.5
他人にわずらわされず、一人にいるとき	13.1	13.7	17.3	17.1	13.8

* 複数回答方式なので、総和が100%にならない

出所 浅野智彦編『検証・若者の変貌』242頁

ちなみに上記内閣府の「国民生活に関する世論調査」(2012年)から、「これからは心の豊かさか、まだものの豊かさか」を年齢階級別に見てみると、確かに20代、30代は、結婚、育児など、生活に必要なものをまだまだ買い揃える必要に迫られているため、その他世代と比べると、物の豊かさを追う傾向は強いが、それでも、それは心の豊かさを超えるものではない。むしろ「心の豊かさ」を求める声は「物の豊かさ」を引き離し、その差は乖離するばかりである。

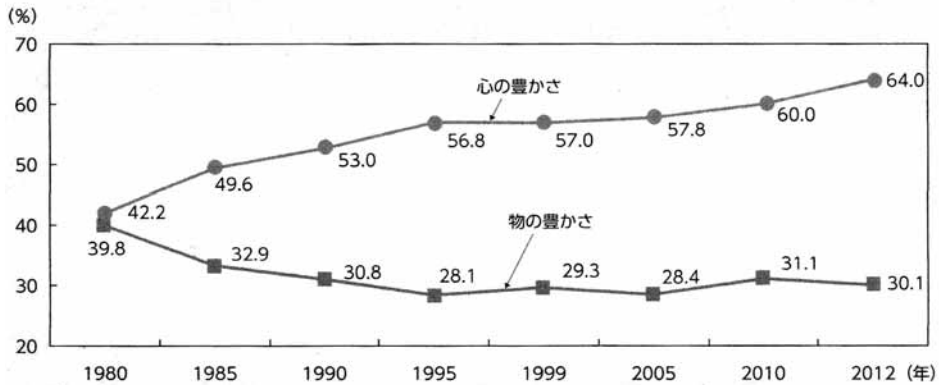
図表9 これからは心の豊かさか、まだものの豊かさか(年齢階級別)



資料：内閣府「国民生活に関する世論調査」(2012年)

出所『厚生労働白書』41頁

図表10 これからは心の豊かさか、まだものの豊かさか（年次推移）



資料：内閣府「国民生活に関する世論調査」

出所『厚生労働白書』42頁

(2) 希望との連動

以上のように、日本の若者は、家族を含めた他者とのつながりそのものに生の充実感を見るのである。関係性の獲得は現在の生活を満足させるものであった。

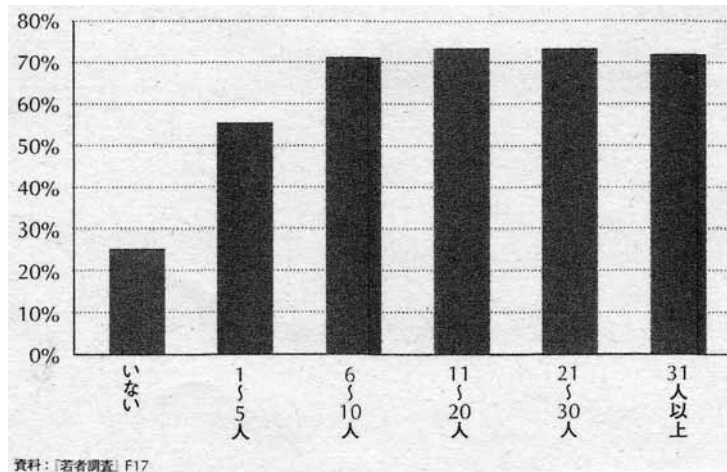
しかも、13歳から29歳までの若者の場合、仲の良い友達の存在は希望にも影響を与えていた。上述したように、日本の若者は将来に対して暗いイメージしか持たず、それは若者から将来の希望を奪っていたのだが、それでも仲の良い友達の存在は将来の希望に正の関係を与えていることを2013年の『我が国と諸外国の若者の意識に関する調査』（以下『若者の意識に関する調査』と明記）は報告している。

同『若者の意識に関する調査』によれば、「仲の良い友人がいない」と答えた若者のうち、将来に「希望がある」と答えた若者はわずか25%しかいなかったが、仲の良い友人が「1～5人」と答えた若者はその55%の者が「希望がある」と答え、「6人以上」になると、「希望」を持つ若者は70%に達するのである。面白いことに「6人以上」の友人の数での数値の変動は余り見られない。将来の希望を持つには6人いれば十分ということである。日本経済への不透明感と不信感とは若者から希望を奪っていたが、友人の存在はそれを打ち消す働きをしていたのである。

さらに『若者の意識に関する調査』は友人との関係に対する満足感と安心感が希望と連動していることを明らかにする。友人との関係に満足していると答えた若者はその75%が将来に希望があると答えていたのである。一方、友人との関係に不満を有する者では将来に希望があるとする者は29%にまで落ち込む。

永井暁子がグレアム・アランの『友情の社会学』（1993）を引用し、自らが参加する東京大学の希望学プロジェクトのアンケート調査で実証したように、友人に囲まれ、自分が誰かに受け入れられていると思えることが人に希望を与えるということである³⁾。現在、希望を有する日本の若者が少ないことが危惧されているが、それを改善するためには人とつながること、つながり実感を抱かせることが肝要ということである。

図表11 仲が良い友達の数ごとに見た「希望がある」若者の割合



出所 鈴木『日本の若者はなぜ希望を持っていないのか』、85頁

2. 人間関係の希薄化論

(1) 希薄化論

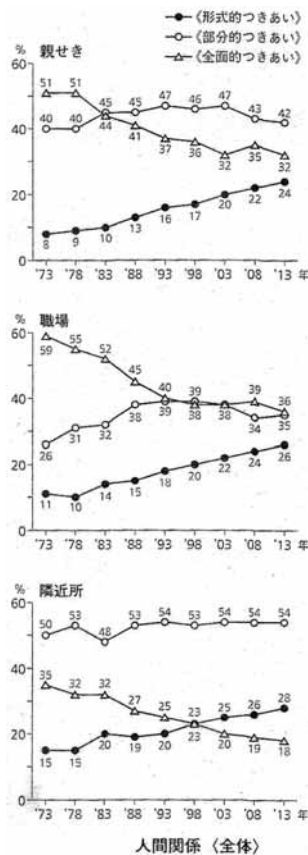
さて、若者の人間関係に関しては、90年代に希薄化させていることが指摘された。携帯電話やインターネットなどの新しいメディア利用のせいで、今の若者は生身の関係を忌避するようになり、人間関係を希薄化させてしまったというのである。「少女たちは群れているようでも、『ガラスの関係』だ。お互いを傷つけた、壊したりしないように気を配る。相手を思いやるでもなく心を割ってぶつかり合うこともない希薄な関係だ」。これは浅野智彦が希薄化意見の典型として取り上げた⁴⁾、2003年7月19日の『東京新聞』の朝刊に掲載された同年の夏に起きた小学生拉致事件についての識者のコメントである。

浅野が指摘するところでは、精神医学者の影山任佐も、若者の人間関係について、「Eメールや携帯電話、ポケベルなどによる表面的な交際、対人関係のネットワークの形成に躍起となり」「お互いの本音や心の深みに立ち入らない」とその著『「空虚な自己」の時代』(NHKブックス)のなかで述べているという。精神科医の大平健も同様、自らの診療室を訪れる若者を診断する中で、今の若者の中には「相手の気持ちに踏み込んでいかぬように気をつけながら、滑らかで暖かい関係を保っていこう」とする者がいることを発見し、それを現代の若者の「やさしさ」とした⁵⁾。人類学者の正高信男に至っては、その著『ケータイを持ったサルー「人間らしさ」の崩壊』(中央公論新社、2003年)というタイトルからも伺えるように、希薄化する若者の人間関係の在り方を「関係できない症候群」と否定的に捉えている。「その背景にあるのは、社会の高度情報化、端的にITにはかならない」とし、「それを象徴するのがケータイの流布」であった⁶⁾。倫理学者の小原信も同様の見解を有し、この背後にあるのは「生身の人間とつきあえば傷つくが、キカイを通せば大丈夫、やばくなればoffすればいい、と言う考えが隠されている」⁷⁾とする。小原も「とこ

とん真剣につきあったりはしない希薄な関わりが主流を占めるようになった⁸⁾とする。久世敏雄や諸井克英らは、その著『現代青年の心理と病理』⁹⁾や『親しさが伝わるコミュニケーション—出会い・深まり・別れ』¹⁰⁾の中で、今の若者は、親密な関係を構築するために必要な対人スキル能力が低下していることを指摘していた。松井豊もまた、その論文「友人関係の機能」¹¹⁾や「親離れから異性との親密な関係の成立まで」¹²⁾において、最近の若者の友人関係には、友人との全人格的な融合を避けて、距離を保ち、一面で部分的な関係にとどめようとする隔離的部分的な志向性と功利主義的な態度が見られるとし、その友人関係は、心理的安定化や発達モデルの提示、対人コミュニケーションスキルの学習といった社会化機能を担うに必要な内実を整えていないとした。

日本人一般の特徴として、全人格的な融合をその内容とする「全面的つきあい」を減少させ、「部分的」「形式的」なつきあいを増加させているという指摘は、上記NHK放送文化研究所の調査によってもなされていた。「親戚とのつきあい」や「職場の同僚とのつきあい」「隣近所の人とのつきあい」の経年変化を1973年から2013年まで辿ってみると、いずれも「全面的つきあい」を減少させ、「部分的」「形式的」つきあいを増加させているということである。今の若者もそうした志向の延長線上にあると松井も捉えるのである。

図表12 NHK調査 (199頁)

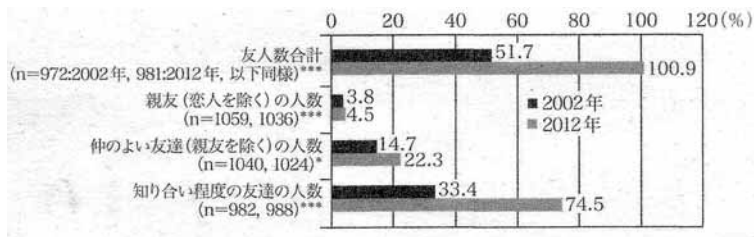


2000年に出版された小此木の『「ケータイ・ネット人間」の精神分析』はその副題に「少年も大人も引きこもりの時代」と付くが、そこでも、リアルな生身のつきあいが苦手になることで希薄化が進むことが指摘されていた。若者の人間関係の希薄化を指摘する類書はこのように後を絶たない。

(2) 「友人の数」調査

しかし、浅野智彦ら青少年研究会が2002年と2012年とに実施した若者の友人関係の定点観測調査¹³⁾はそれら見解を打ち消すものとなっている。同調査によれば、若者は友人数を大幅に増加させているだけでなく、すなわち、2002年の51.73人から2012年には100.91人へとついに100人を超えるに至っているばかりか、「親友（恋人を除く）」に対してもその数を増やし、2002年の3.8人から2012年には4.5人となっていることを明らかにする。「仲のよい友達（親友を除く）」の数も変わらない。2002年には14.7人であったそれは2012年には22.3人にまでなっている。「知り合い程度の友だち」もその数を増やし、2002年の33.4人から2012年には74.5人にまでその数を増やしている。現在の若者の方が親友を含め、友人の数を増やしているのである。これらデータを見る限りでは、今日の若者が友人関係を大きく後退させているとはいえない。

図表13 友人数の経年変化

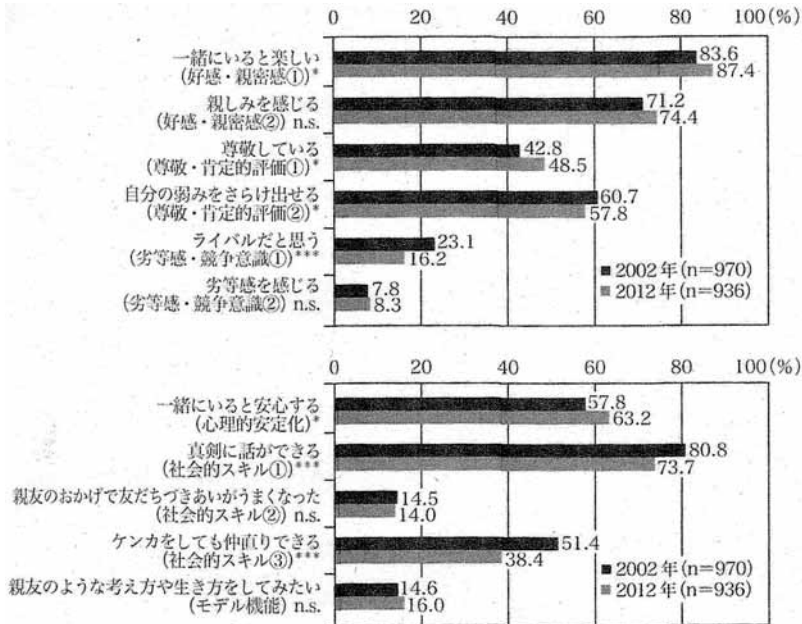


出所 藤村正之他『現代若者の幸福』82頁

(3) 「親友」像

しかも、データは数のみならず、質の高さも担保していることを想像させる。親友の主観的意味を語る調査では、「一緒にいると楽しい」と答えた者は2002年の83.6%から2012年には87.4%と3.8%の伸びを示し、「親しみを感じる」も71.2%から74.4%とさらなる伸びを見せている。自己開示を意味し、親友作りには欠かせない「自分の弱みをさらけ出せる」という項目では若干の減少を見ているものの、それでもなお高い水準にそれはあり、いまだ深いつながりがあることを示している。「尊敬している」という項目でもその割合は少ないながら、伸びを見せており、それらを内容とする「親友」を今の若者達が増やしていることをデータは示している。

図表14 「親友」の主観的意味（上段）と社会化機能（下段）の経年変化

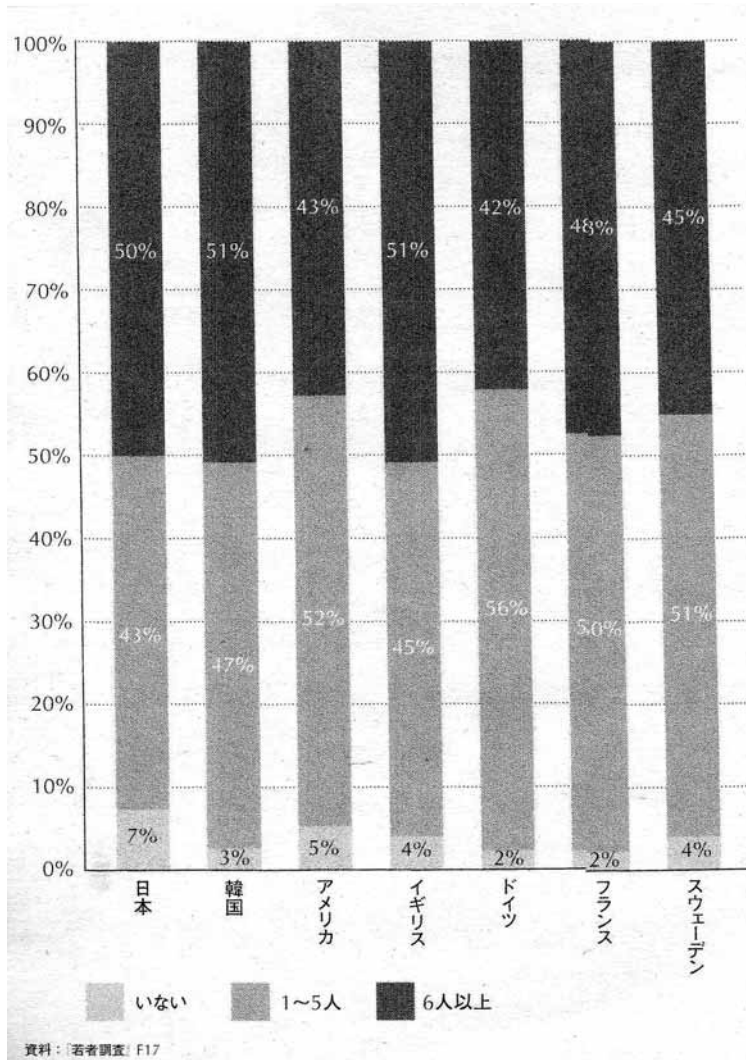


出所 藤村正之他『現代若者の幸福』84頁

後述するように、それら親友は「真剣に話ができる」相手であり、「一緒にいると安心する」存在である。前者に関しては、2002年の80.8から2012年には73.7%とその数を減らしてはいるが、それでも7割の者が真剣に相談できる環境を持ち、6割の者は親友と一緒にいることで安心感を得られている。この数値は2002年の57.8%を超えるものである。ただ何を持って「真剣」とするかに関してはその中味は検証する必要があるが、それでも上記否定的見解とは異なり、今の若者も親友と深いつながりがあることを伺わせる。希薄化論を退ける結果となり得ている。

ちなみに、上記各国別に見た別の「友人の数」の比較でも、「友だちがいない」とする日本の若者は2012年現在で全体の7%であり、青少年研究会の2002年データ6.9%と変わらない。その数値はその他6ヵ国と比べれば最も高いが、それでも「6人以上いる」と答えた日本の若者は50%おり、これは各国と比べても高い数値である。日本の若者の友人数がとりわけ少ないという訳ではないことが伺える。

図表15 友人の数



出所 鈴木『日本の若者はなぜ希望を持っていないのか』、87頁

(4) 「親友」「仲のよい友達」と知り合った場所

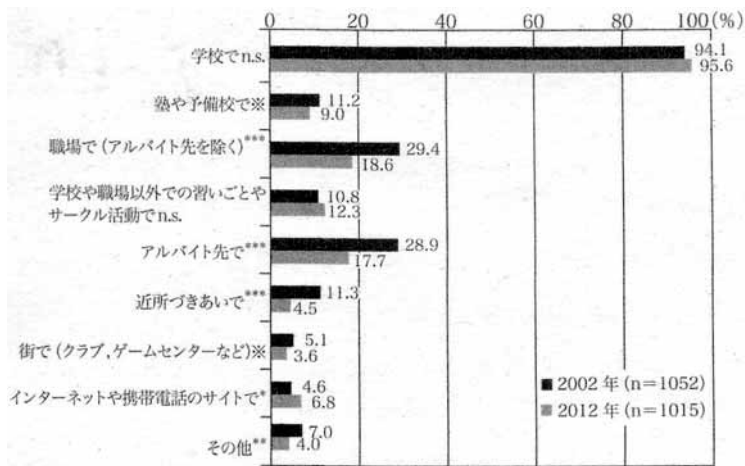
ただ予想外であったのは、「親友」さらには「仲のよい友達」と知り合った場所である。情報機器の発達とその生活への浸透、いわゆるケータイやネット、スマホ、SNSなど、ネットを介したコミュニケーションスタイルが確立されるなかで、知り合う場所もそれに移行していることが予想されたが、またそうした指摘を2002年調査時ではしていたが、2002年から2012年までの経年変化を辿る限りでは、相変わらず知り合う場所が「学校」であり、その割合はむしろ伸長していることが伺える。2002年に94.1%であったそれは、2012年には96.6%と1.5ポイント跳ね上がっている。

「インターネットや携帯電話のサイトで」という回答もその数を増やしているが、もとの割合が低く、4.6%が6.8%へととなっただけである。

モバイルコミュニケーション研究会や東京都生活文化局、さらには社会情報研究所が実施する調査では、それらが新たな友人関係を創り出し、維持するための重要なツールとなりつつあることを示していたが、そうした現実には2012年調査からは得られなかった。

さらに、2002年の調査の段階では、アルバイトをする高校生が増えたことから、「アルバイト先」や「インターネットや携帯サイト」が「友人を得るきっかけ」となり得ていることが指摘されたが、またそれは内閣府が定期的実施する国際比較調査によっても裏付けられていたために、バイトの持つ意味の重さと共に、高校生の生活構造が学校を中心としたものではなくなっていることが指摘されたが、2012年度の調査では、そうした現実には否定され、相変わらず高校生の生活構造が学校を中心としたものになっていた。昔のそれと変わらず、学校が依然として出会いの場所の中心となっていたのである。2002年調査段階ではその数を増やしていた「職場（アルバイト先を除く）」もその数を減らし、29.4%から18.6%になっていた。「近所づきあいで」という項目でも11.3%から4.5%へと減少を見ており、地域社会が現在の若者にとって友人形成の場とはなり得ていないことを示している。現在の日本人は地域の人とのつながりも「全面的つながり」から「部分的」「限定的」つながりへと移行させていることが指摘されるが、その通りの状況が若者の間にも見受けられたのである。

図表16 「親友」「仲のよい友達」と知り合った場所の経年変化



出所 藤村正之他『現代若者の幸福』79頁

(5) 友達をつくるときに役立っているメディア

それでも、上記友人関係の定点観測調査から「友達をつくるときに役立ったメディア」をみると、「インターネットのサイト」が最も大きな伸びを見せており、2002年にはわずか12.4%にすぎなかったそれは、2012年には44.5%と大幅伸長を見せるに至っている。

「インターネットや携帯サイト」は「友人を得るきっかけ」とはなり得ていないが、友人関係の維持・拡大には有用なツールになっているということである。現代の若者はかつての若者と比べようがないほどその友人関係を肥大化、巨大化させているが、それはこのような情報機器の発達と生活への浸透なくしてはあり得ない。

反対に、2002年の50.8%あった「携帯電話等での通話やメール」は、2012年には32.2%と大幅な減少を見せており、友人形成のツールが携帯からインターネットに移ったことを予想させるが、それでもその割合はなおも高いことから、携帯電話はインターネットと共に友人を作る有用なツールとなり得ていることを伺わせる。

(6) 周辺の希薄化

さて、上記2012年調査から「友人全般とのつきあい方の経年変化」を辿ってみると、「友達をたくさんつくるように心がけている」という項目や「友達と意見が合わなかったときには、納得がいくまで話し合いをする」項目においてその数値を下げている。2002年には52.3%あった「友達をたくさんつくるように心がけている」という項目は2012年には43.6%となり、「友達と意見が合わなかったときには、納得がいくまで話し合いをする」という項目も2002年の50.2%から2012年には36.3%となり、特にその乖離が激しい。「初対面の人とでもすぐに友達になる」という項目でもその数値を下げ、以上を見る限りでは、現在の若者の人間関係の希薄化は進行していると言える。

しかし「友達との関係はあっさりしていて、お互いに深入りしない」という項目では、2002年の53.7%から2012年には48.5%とその数値を下げ、友人との関係をより濃くしている今の若者の姿が浮かび上がる。

また、上記「友人の数」と「親友の在り方」の調査をこの調査と照らし合わせて考えてみると、その中心にしっかりとした親友を有しているが故に、また以下でも詳述するが、情報機器の進展と生活への浸透によって、それまで培った人間関係を切ることなく、今なお保持し続けている現在の若者にとって、敢えて友人を「たくさんつくるよう心がける」必要もないし、「意見が合わなかったとき」に「納得がいくまで話し合いをする」のは「友人」に求める機能ではなく、親友に求める一つの行為に他ならない。今の若者は親友と友達とを峻別しているのである。親友を中心に置き、その周辺に様々な友達を置き、「遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友達を使い分けている」のが今の若者なのである。情報機器の発達とその生活への浸透により、友達とのつながりがかつてよりも容易にし、かつ広げた現代の若者は、場面場面に応じて、適切な友人関係を選択できるようになっているのである。いわゆる友達関係の選択化論である。それは2012年の調査データにも示され、「遊ぶ内容によって一緒に遊ぶ友達を使い分けている」という項目では71.1%の者がそれを挙げ、2012年のその数値は2002年の65.9%を5.2ポイント超えるまでになっている。もともとのポイントがすでに高いものであったが、さらに伸長しているのである。まさに「選択化論」を肯定する状況が見て取れる。選択的な友人関係の在り方がある程度一般的になっていることを示す結果となっている。

従前と変わらぬ「親友」をその中核に持ちながら、「仲のよい友達」、さらには「仲間」「知り合い」をその周辺に拡大させ、遊ぶ内容によって使い分けているのが現代の若者、その姿といえようか。

(7) 友人による社会的機能

このように多様な友達を周辺に抱えようとも、その中核には親友がいるため、松井によって指摘される社会化機能の低下も退けられることになる。2012年に実施された上記若者に対する定点観測調査は『『親友』の主観的意味』と共に「親友」の「社会化機能」も取り上げ、検証しているが、それによれば、社会的スキル学習に当たる「真剣に話ができる」という項目では73.7%の者がそれを挙げており、その数値は2002年の80.8%より少ないものの、それでもなお高い割合を維持しており、親友が社会的スキルを身に付けさせるに十分な存在となり得ていることを伺わせる。「ケンカをしても仲直りできる」という項目では51.4%から38.4%の減少を見せ、友人が社会的スキル機能をこの点では担えなくなっていることを伺わせるが、「親友のおかげで友だちづきあいがうまくなった」とする項目では0.5%の減少を見ているだけで、従前とは変わらない存在である。

一方、「一緒にいると安心する」と答えた若者は2002年の57.8%から2012年には63.2%と5.4%の伸びを見せており、親友は「心理的安定化の機能」を果たしていることを示している。親しさの度合いが高く、自分と似通った友人からは心の安定が導き出されるのである。「親友のような生き方をしてみたい」とする項目では微増を見せているものの、16.0%と低く、従来、友人関係の機能の一つとして期待されていたモデルの提示という機能は果たされていないことが伺える。

それでも、友人関係の広がりとは異なるタイプの友達と接する機会を増やすだけに社会化スキル技能の習熟と共に、モデル機能をも果たすことになる。

以上のように、現時点においても友人関係の変質を前提に危惧されていた「心理的安定化」と「社会的スキルの学習」という社会化機能は親友が一定程度担っていることが伺えた。

辻大介はいくつかの統計データから、現代の若者の友人関係は人数的にも満足感といった点においても衰退しておらず、むしろそれは増加傾向にあり、人間関係を希薄化させていないことを主張するが、まさにその通りである。浅野智彦（1999）や松田美佐（2000）も同様の立場に立ち、人間関係の希薄化を支持する根拠を見ない。上記2012年調査の結果もまさにそれを裏付けるものであった。

さらに、辻は選択化理論を支持し、現代の若者は場面場面で友人を使い分けしているとすが、これもその通りである¹⁰⁾。現在の若者は友人関係や自己を場面場面に応じて使い分けしているのである。

(8) 友人を作る際に重視するポイント

ちなみに、そうした人間関係を有する現代の若者だが、彼等彼女らは友人と親しい関係を築くに当たっては「相手の考え方に共感できること」、「相手と趣味や関心が近いこと」にポイントを置く。その数値はそれぞれ86.4%と82.1%である。逆に低いポイントに留まるのは、「相手の社会的な立場や地位が高いこと」や「相手の容姿や顔立ちが自分の好みであること」、さらには「相手のファッションが自分の好みであること」である。それぞれ6.0%、21.0%、25.1%である。

上記調査からは、現代の若者は外面的要素や属性的要素ではなく、内面的要素に力点を置いて友人を選択している姿が見て取れる。友人と親しくするためには互いの内面を理解することが大切ということである。その意味では、希薄化論者が指摘していたような友人

関係における互いの内面軽視という姿はここには存在しない。今の若者たちは従前と何ら違うことなく、友人を作るに当たってはその内面を重視しているのである。

3. つながりを目指す若者たち

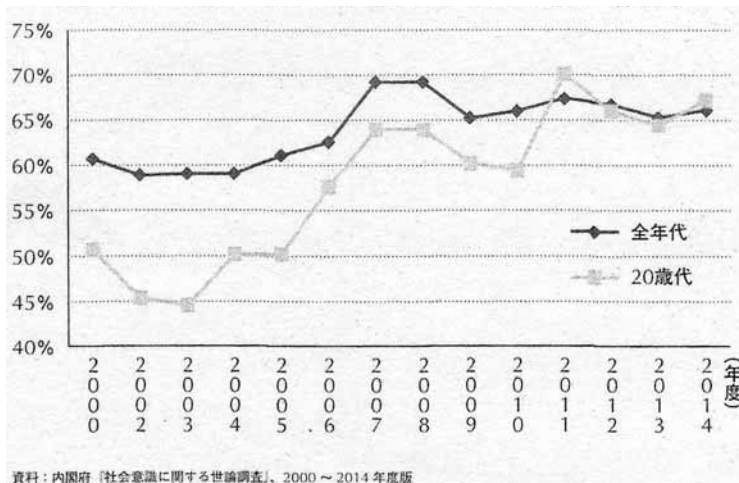
(1) 「社会の役に立ちたい」

上記2013年厚生労働省政策統括官付政策評価官室委託の「若者の意識に関する調査」においても、若者が他者との関係性の構築を希求している様子が伺える。「社会のために役立つことをしたいと思うか」との設問に「そう思う」と答えた若者は20.8%おり、「どちらかといえばそう思う」の59.2%を加えれば、約8割の若者が社会貢献に前向きなのである。明確な理由がある場合には、自らの人間関係を越え、つながりを志向する姿が見取れる。

厚生労働省政策統括官付政策評価官室が内閣府の「社会意識に関する世論調査」から作成した「社会への意識貢献」調査でも、日頃から社会の一員として何か社会のために役立ちたいと思っている者の割合は、年によって上下変動は見られるものの、その経年推移としては上昇傾向にあり、2014年度には66%にまで達している。しかも20歳代に限ってそれを見てみると、同じく上昇傾向にあるだけでなく、その上がり幅はどの世代よりも大きい。2000年代の初めには全世代と差が20ポイントほどあったが、2014年現在のそれは全世代を上回るほどの数値である。「今の若者は社会に無関心」であるという指摘は当たっていない。

全国の大学生600人を対象に、電通が2014年10月に実施した「ワカモン」データによっても、若者がボランティア活動に積極的に参加し、社会的行動として定着させつつあることを伺わせる。

図表17 社会のために役立ちたいと思っている人の割合

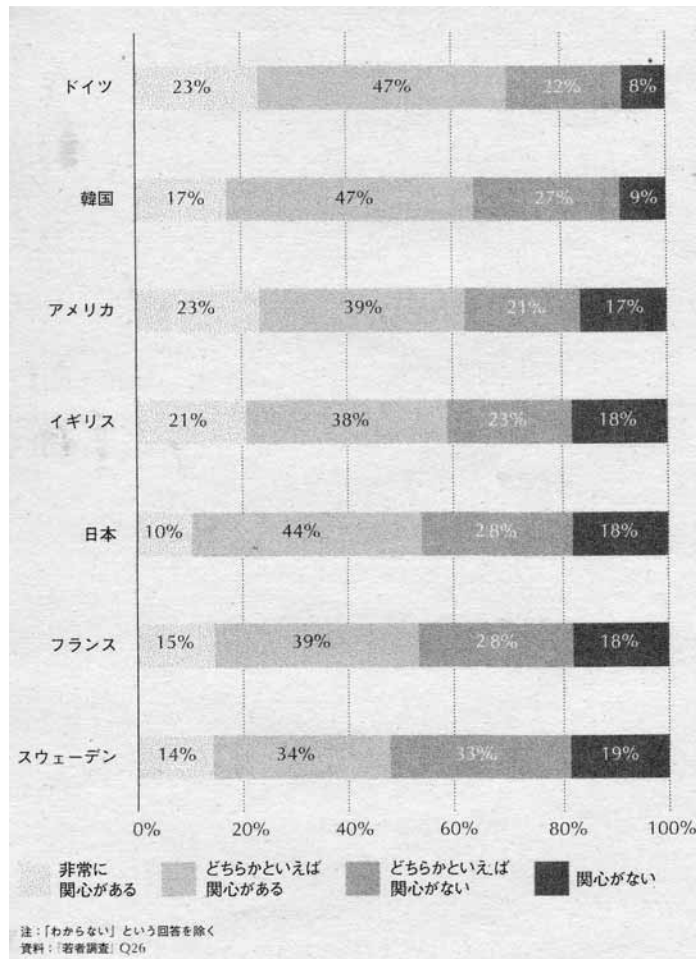


出所 鈴木『日本の若者はなぜ希望を持ってないのか』、151頁

『日本の若者はなぜ希望が持てないのか』の著書をもつ鈴木賢志なども、「知識が足りなかったり視野が狭かったりして、彼らの意見に物足りなさを覚えることが多い」が、『自分さえ良ければいい』ではなく、この社会をどうしていけばよいかということに関心を持つ若者が、最近増えている気がする」という¹⁵⁾。そして、その理由として鈴木は、『ゆとり教育』以降、社会との関わりを重視し、それを意識させるような教育が積極的に取り入れられてきたこと、また東日本大震災という未曾有の危機に直面したことで、多くの若者が、自らが社会で果たすべき役割を真剣に考える機会を得たこと、あるいは巨額の累積債務をはじめとして様々な問題を抱える日本社会があまりにダメすぎて、関心を持たざるをえなくなったこと」を挙げ、さらには「そうやって意識が高まってきた若者たちが、情報を交換したり意見を交わしたりする手段として、SNSや掲示板などのインターネット・コミュニケーションが果たした役割を無視できない」とする¹⁶⁾。今の若者は従前のテレビや新聞で情報をキャッチするのとは異なり、SNSやフェイスブックなどのような新しい媒体、新しい形でニュースに触れ、コメントしたり、コメントし合ったりして、彼らなりの社会意識を醸成しているということである。

確かに政治に対して関心を持つ若者の割合は決して高いとは言えないが、すなわち、従前の『若者調査』において、政治に「非常に関心がある」と答えた者の割合は、ドイツ・アメリカの23%、イギリスの21%、韓国の17%、フランスの15%、スウェーデンの14%に対し、日本のそれは7カ国中最も低い10%であるが、それでもそれに「どちらかといえば関心がある」者の割合の44%を加えれば、スウェーデンを上回り、フランスと並んで7カ国中の5番目に位置づけられる。「まだ低い方ではあるが、それほど滅茶苦茶に低いというわけではない」と鈴木は指摘する。ただ「政治的リテラシーが欠けている」ので、日本の若者は「投票には行かない」とする。すなわち、関心を持って手にした情報も、「家庭」教育や「高校」教育によって「政治的に読み解く能力」が培われていないため、党の特徴の無知と相俟って、すなわち、どの政党がどのような政治を展開しようとしているかわからず、投票行動に移れないし移らないという。鈴木はまた、「毎年のように選挙」を実施する日本の状況も「多くの有権者を思考停止に陥」らせるとする¹⁷⁾。

図表18 政治に関心がある若者の割合



出所 鈴木『日本の若者はなぜ希望を持っていないのか』、155頁

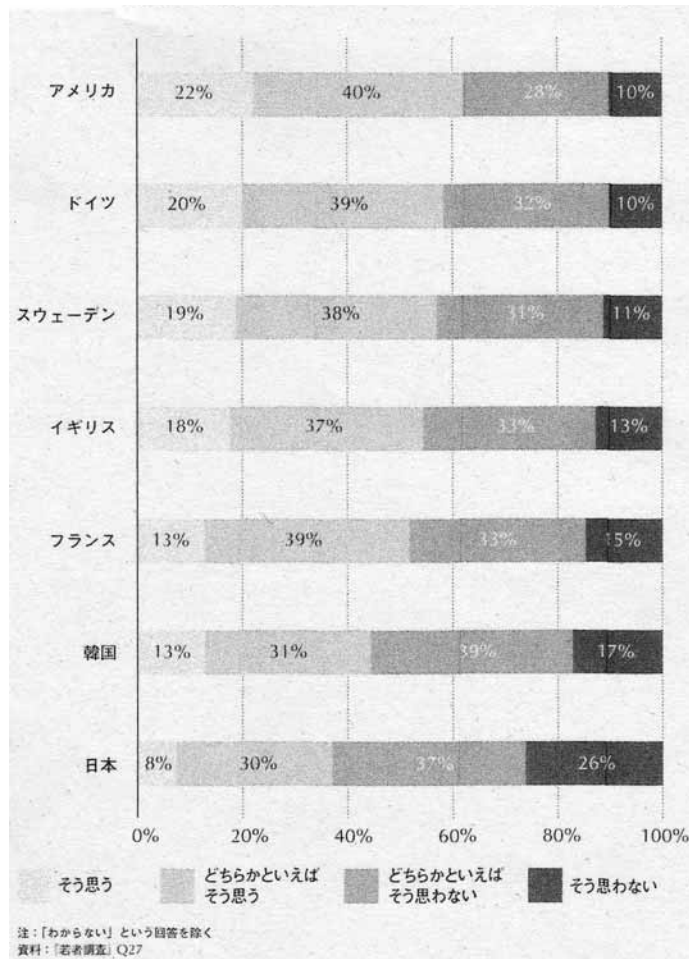
ちなみに、『若者調査』には「私の参加により、変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」という質問、いわゆる「自分の参加が社会を変えられると思う若者の割合」もまた明らかにしているが、やはり日本は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」という回答が7ヵ国中で最も少なく、それぞれ8%と30%である。肯定的回答は38%しかない。反対に、「どちらかといえばそう思わない」と「そう思わない」を合わせた割合は63%に達している。このように、後ろ向きの回答が半数を超えているのは日本と韓国だけである。しかし、韓国と比較しても日本の若者の希望のなさは目立つ。

不況生まれで、デフレ育ち、バブル崩壊以降、ITバブル崩壊やリーマンショックなど、経済危機ばかりを体験する若者にとって、高度経済成長期のかつての若者が感じたような、頑張れば報われるという見通しはなかなか持ち得ず、それどころか、周りの大人を通じて

無力感ばかりを学習してきてしまったために、行動と結果の随伴性がなく、社会変革の可能性をなかなか持てずにいるのである。行動可能性期待、結果期待を持てずにいる。他者とのつながりを志向し、社会に役立ちたいとする若者はその数を増やすも、社会を変革する主体としての希望のなさから、またそこに政治的リテラシーの欠如とが相俟って、日本の若者は政治行動へと踏み出せずにいるのである。すなわち、投票行動へと導けずにいる。

このように、日本の若者が有する他者との強いつながり志向は、変革主体としての希望のなさによって打ち消されてしまっているのである。彼らが有する社会への関心の高まりに応えるためには、学校教育によって政治的リテラシーを向上させ、自分の参加によって社会を変えていくことができるのだという意識、希望を持たせることが必要ということである。学習性無力感、いわゆる無力感の継続は今若者が有する社会とのつながり志向そのものを奪っていく。

図表19 自分の参加が社会を変えられると思う若者の割合



出所 鈴木『日本の若者はなぜ希望を持たないのか』、160頁

さて、総務省が平成23年に実施した「ICTインフラの進展が国民のライフスタイルや社会環境等に及ぼした影響と相互関係に関する調査」によっても、人がつながりを求め、その志向が10代で特に顕著であることが示されている。「人と一緒にいるのが好きである」という項目に対し、ポジティブ意識、すなわち、「そう思う」「まあそう思う」と答えた者は、60代までをも含めた全体では68.1%であったが、年代が下がるにつれてそのポイントは大きくなり、20代では76.4%の者が、10代では83.5%の者が「人と一緒にいるのが好きである」と答え、強いつながり志向を有していることが見て取れる。「いつも友人や知人とつながっているという感覚が好きだ」との項目でも、ポジティブ意識を有するのは全体では53.8%であったが、20代では56.3%、10代では68.5%であった。ここでも若年層に行くに従い、つながり志向を有することが見て取れる。

NHK放送文化研究所が2012年に実施した『NHK中学生・高校生の生活と意識調査—楽しい今と不確かな未来』（NHK出版）によっても、今の若者が「友だちづきあい」に高い関心を持っていることが伺え、それは最上位にランクづけられていた。内閣府の青少年調査（内閣府政策統括官『世界の青年との比較からみた日本の青年』）も同じことを示し、若者が「友人と一緒にいる時」に最も充実感を感じていることを指摘していた。

このように今若者たちは人間関係それ自体、それは特定される人間関係だが、それに喜びや楽しみを求めているのである。若者が頻繁に行う他愛のない内容のメールのやり取りも、ただ単につながり感を感じたいがためのものであり、心を満たすためのものに他ならない。

精神科医の大平健は、その著『やさしさの精神病理』で、今若者たちの間では新しいやさしさが広がっていること指摘する。一人の患者を引き合いに出し、以下のように説明する。「やさしい暖かい沈黙。……中略……言葉はヤサシサの邪魔になるんです。お互いの気持ちには立ち入らないで、お天気の話とかテレビ番組の話とか旅行の話とかを喋ってなかよくしているのがヤサシイと思う。だけど、一緒に音楽聴いたり、ファミコンやったり、マンガ読んでいるのはもっとヤサシイ。何も喋らないで一緒にいて、何かやっている。これが私の言うヤサシイ暖かい沈黙」¹⁸⁾。こうしたやさしさが今若者たちの間に広がっていると大平は指摘する。

若者たちは、人間関係を希薄化させているどころか、関係構築を求めているのである。人を求めているのである。全国の4年制大学生の1年生から4年生までの計600人を対象に、電通が2014年10月に実施したアンケートによっても、7割の大学生が「人間関係をもっと広げたい、深めたい」と答えていた。

むしろ「今の若者は、周りの人とSNSで簡単につながることができ、また、中学や高校の友達ともつながり続けるので、ツイッターやフェイスブックを見ると、数百人、千人単位で『ともだち』がいることも珍しく」なく、今では『つながり過多』『つながり疲れ』から「広がりすぎてしまった人間関係を整理したいという欲望」すら湧いているのである。¹⁹⁾ かつては高校、大学と進学するたびに疎遠になり、切れてしまいがちであった友人関係も、今やSNSが「若者達のインフラと化した」結果、その関係は切れるどころか膨らみ続けているのである。都会に出た友人ともつぶやきや投稿でリアルタイムに近況を知り得るので、その関係は切れることはないのである。電通若者研究部が首都圏在住の大学生を対象に実施した2015年の調査によっても、現在の若者が所属しているグループ数を増

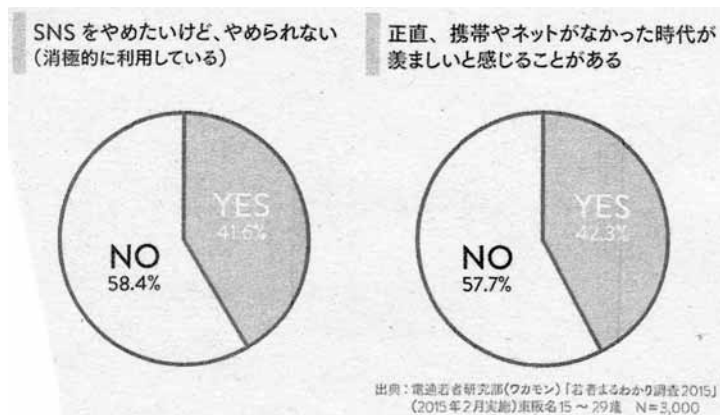
加させていることが伺え、2010年に平均4グループであったそれは、2012年には6グループとなり、2015年には7グループと増えていた。グループ数の増加に伴い、友人数も増え続けているのである。

しかもその「つながり」は「常時接続」なのである。「若者の手元にはつねにスマホがあり、Twitter、LINE、Facebook、Instagramなど複数のSNSを目的に合わせて使い分けながら、いつも誰かとつながって」いるのである²⁰⁾。

そればかりか、彼らは「Twitterで見ず知らずの人」とも「フォローし合うなど、SNSを通じて新しいつながりも増えて」いるので、「他人とコミュニケーションを取る量と機会は増大」し、「かつての若者より『他人の目にさらされる機会』が多くなっている」²¹⁾のである。

故に、「人間関係をもっと広げたい」とする数値が71.5%、「人間関係をもっと深めたい」とする数値が70.0%ある一方で、50.7%の者は今の「人間関係をリセットしたくなる」とある」と答えている。その数2人に1人である。ツイッターアカウントを2つ以上持ち、特定の人にしか見せない「鍵付き」アカウントで本音トークを繰り返している若者も存在するが、それも無理からぬことである。ツイッターではフォロワーの目を気にしながら情報発信するが、また投稿ネタも、みんなにうけるか否かが基準となるが、鍵アカやLINEのグループではそう言ったことを気にせず、本音トークをしたいということからである。それによって、ストレスの発散を図りたいという。恋人や親友とはこのように今流行りの「クローズドSNS」でつながり、その質を高める一方で、今の若者は拡大しすぎた友人関係をリセットしようとしているのである。リセットを求めるまで、そのつながりに疲れている。2015年の電通若者研究部の調査によってもそれは伺え、「SNSをやめたいけど、やめられない」が41%、「正直、ケータイやネットがなかった時代が羨ましいと感じることがある」が42.3%あった。

図表20 若年層のデジタルに対するネガティブ意識



出所 電通若者研究部編『若者離れ』167頁

しかし、その実、リセットといっても関係の破棄を行うのではなく、あくまでつながりの再構築、いわゆる整理であり、恋人、親友とのつながりを強めるためのものである²²⁾。特定の人との関係を強めるがためのものであった。穿った見方をすれば、上記若者が求める社会性、いわゆる社会貢献意識も、友人にそうした自分を認めさせ、友人関係を保持したいと思わせるに必要なものかもしれない。

いずれにしても、今の若者は友だちと一緒にいるだけで、喜びとなることが上記からは伺える。まさにそれは今の生活に彩りを与え、充実させるものであった。

(2) 「叱られたい」

今、若者を中心に叱られ願望が広がっているといわれるが、これもまた若者がつながり志向を有していることの現れである。「叱られる」ことについて尋ねたNHK（2014年9月19日放送の『NHK特報首都圏』）のアンケート調査では、およそ4割の人が「叱られたい、叱ってくれる人が欲しい」と答えていた。ネットでは「アイドルに怒られ続ける番組」も存在し、その番組は動画再生回数120万回超を誇り、異例の人気を博しているばかりか、夜の街でも「ママが客を叱り続ける店」が大繁盛しているという。「お前みたいな上司が扱いつらいだろ。」「バカじゃないの。」という具合である。また、ネット上では「おっさんレンタル」というサービスが話題になり、42歳の経験豊かな中年男性、その本業はファッションプロデューサーということであるが、その人が相談料1時間1,000円で相談に乗り、叱ってくれるそうである。もともとは人生相談を目的に利用するものが多かったというが、最近では「叱ってもらいたい」と依頼してくる若者が後を絶たないという。彼女にふられ、落ち込んでいる自分を叱ってほしいというものである。2月6日のTBS系の「新・情報7 daysニュースキャスター」でもそれは紹介されていた。同番組によると、入社3年目までの若者の8割が「正当な理由があれば上司に叱ってもらいたい」という調査結果があるという。

少し古い資料だが、2010年9月13号の『プレジデント』²³⁾に掲載された「逆効果！あなたのムチの入れ方」と題する記事は、全国の正社員1,000人、その内訳は20代400人、30代400人、40代前半200人のそれぞれ男女同数ずつに行ったアンケート調査にもとづいている。それによると、「叱られる側の意見」としては、①「叱られて初めて、進め方が悪かったなど自分に足りない部分がある」、②「人を育てるためには、叱ることは必要だと思う」、③「叱られたことの方が脳裏に焼き付いているため、最終的に自分のためになる」等が挙げられ、「叱られる側」は「成長」を求め、叱られことを希求しているその姿が見て取れる。成長実感は人が「充実感」を覚えるのに必要な感覚のひとつであり、人を動機づける要因のひとつとなっていることを考えると、人は充実感を感じたくて叱られることを求め、受容しているということである。成長に関しては、2014年9月19日放送の『NHK特報首都圏』でも、「怒られないと成長できないと思う」という女性の声が紹介されていた。今の若者に自信がないこともその答えの一つであり、叱られることで成長したいという気持ちからであろう。それ以外の答えとしては、同じくNHKが④「どこまでが正しくて、どこまでが間違っているかというのが自分で判断付かなくて」叱ってほしいという20代女性の回答も紹介していた。判断基準を求めて叱られたいということである。これもまた「成長」希求の一つである。

しかし、⑤「怒ってくれないと、自分のことを本当に考えてくれているか不安になる」という男性の声はそれら成長実感とは異なるものである。それはまさに関心を持ってもらっているか否かを確認するための行為としての叱りである。⑥「叱られることで愛情を感じたり、信頼関係を築けたりする」という34歳の女性の声も同じである。

「おっさんレンタル」の西本さんによると、「今の若者は他人から何か本気で言われることが少ない」といい、「それが叱られたいという気持ちにつながっている」と説明する。NHKの分析でも、ネット・コミュニケーションの波にもまれ、成長に実感が持てず、心に迷いを抱く若者たちの間で、本音のコミュニケーションをとりたいという欲求が高まっているとしていた。

このように、叱られたがるその理由を若者に問うと、成長したいとか、判断基準を得たいと答えるが、その背後には関係希求が見え隠れする。叱られないとつながり感を感じず、不安になるということであった。このように、若者の現実を見ると、若者の希薄化論とは全く別の姿が浮かび上がってくるのである。ネット社会の普及から人はラインやメールを通じて以前よりも広範囲に他者とつながっている感があるが、また実際にそうであるが、若者はそれでもより実感のあるつながりを同時に求めているということである。ネットにはない価値に惹かれているということである。若者の言葉を使えばリアル感ということであろうか。

(3) 若者のイベント熱

現代の若者のつながり志向は近年高まりつつある若者たちのイベント熱ともなって現れている。全国の大学生600人を対象に電通が2014年10月に実施した上述の「ワカモン」データによってもそれは伺え、「1年以内にやったことがある」イベントとして、大学生の4人に1人の24%が「タコパ」、いわゆるたこ焼きパーティを挙げ、26.8%とほぼ同レベルのスコアで「人狼ゲーム」を挙げる大学生が多かった。特に前者においては地域差も見られ、関西の大学生のスコアが少し高めというが、それでも若者たちに言わせれば、どちらのイベントも「身近な友人との時間を、より充実して過ごすための場でありツール」にすぎず、「何をするというより、誰とする」かが大切であるという²⁴⁾。「リムジンパーティー」なども女子学生を中心に流行っているというが、友達との「思い出づくり」が目的だとする²⁵⁾。

それは同じく電通が2014年に実施した日本最大級の学生団体である「AGESTOCK2014 実行委員会」の学生たちへのヒアリングからも確認でき、彼らは「単純にイベント好きで参加している」というよりも、その背後には友人の存在が見え隠れする。すなわち、彼らは「好きなアーティストのライブでも、1人だったら行かない」という。「イベントに参加するのは好き」だが「自分でチケットを取ったりするほどではなくて、友達や知り合いから誘われたら」行くなど、彼らはライブそのもの楽しさを見出しているというよりも、「公演後に友達と感想を言い合ったり、余韻に浸ったりするほうに楽しさを見いだしている」。「仲のよい友達と一緒に楽しむこと」それ自体が「イベントの魅力」だとする。「彼らはイベントそのものよりも『誰と行くか』に重きを置いており、友達と気持ちを共有することや友情を深める機会をイベントに求めている」ということである。

その証拠に、「知り合いが出演するイベントは見に行きたいと思う」「友達が企画してい

るイベントには興味がある」など、「どんなイベントか」よりも「誰のイベントか」を重視する傾向にある²⁶⁾。イベント実施に関する別のアンケートでも、「自分が楽しければいい、ってわけでも」なく、「誘われたらやる」と答えていた。「イベント系で断ることはあまりない」という²⁷⁾。

電通は「一概には言えない」とするものの、「彼らのイベント熱の火種は『友達』であり、「イベントは『内輪』の絆を深めるための手段になりつつあるのかもしれない」とする²⁸⁾。曰わく、つながり感の充実を求めてのイベント参加であった。

また、最近の若者は、友達と一緒に食事をする時に、「肉会」とか、「ウイスキーを飲みに行く会」「海鮮丼を食べに行く会」とか、何かと名称を付けてイベント化して楽しむ傾向にあるが、これなども自らが所属するコミュニティ内のネタにしたいがためのものであるという。旅行するに当たっても、「キャッチーな旅のタイトルを付けることで、旅先でも一緒に行く仲間の中での内輪感が刺激され気持ちが盛り上がる」ばかりか、「旅の最中や後には、SNSや友人との会話でネタにしやすく、コミュニケーションにも役立つ²⁹⁾」という。単に食事に行ったのでは、また旅行に行ったのではLINEに挙げられないが、そのように名称が付ければ、友人に紹介するのも便利だということである。ネーミングを付ければ様々な形で2倍も3倍もその楽しさを味わえるということである。まさに今の若者がつながりを意識していることの証左である。

むしろ今の若者は人とのつながりを多様化させる中で、「彼らはその都度状況に応じて、異性から同性から、社会から、いわば『つながっているみんな』からどう見られるか＝『どうウケるか』を意識しながら行動している」とされる。「つながっているみんなからウケたい」とするマインドを持っているとする。「ツールごとにシェアする内容や会話のノリを変える」のもそのためで、特に「社会ウケ」に関しては、すなわち、「社会に出て働いている人からどう見られ」るかについては「敏感」であるという。「例えば、初対面の人と連絡先を交換するときも、『同世代の友達とはLINEのアカウントを交換』するが、『社会人の方とはフェイスブックやGmailを交換する』」という。そして「フェイスブックに投稿するときも企業の方から見られていることを意識」して投稿するという。「学生ノリ(＝「内」)の姿は、社会人(＝「外」)には見せないのが彼らの基本」であるという。「彼らは、『パブリック』と『プライベート』の感覚を、無理なく自然体で身につけているのである」。電通の見解によれば、「このようなコミュニケーションツールの使い分けの根底にあるのは、『社会ウケ』を含む『全方位ウケ』の意識」だという。「誰からも嫌われたくない、と言うオモテ面の『全方位ウケ』と「その裏側に存在する、本音を発散できる場としての『内輪』、「この絶妙なバランス感覚のもとで、若者たちのコミュニケーションは成り立っている」とする。例えば、『『異性からモテたい』という意識』以上に、「誰からも『嫌われたくない』という意識」が強く、『全方位ウケ』の背景には、そういった彼らの周囲の反応に対する敏感さがある」とする。「女子会」では皆、「派手な」「かわいい服」を着るが、「合コン」では「周りから浮かないように無難な格好をしていく」のも、「同性からの視線を気にする」故のことである³⁰⁾。今の若者にとって「幸せを左右する」ものがまさに「つながり」である故に、それへの配慮は細かいのである³¹⁾。

古市なども電通のインタビューに答え、「人間にとって一番素朴な楽しみ」は「友達とそのコミュニティ内の話をすること」であり、「それがもはやLINEとかできてしまう」

が故に「それに打ち勝つエンタメがなかなか探せないのが今の消費社会である」とする。今は「どこかに旅行に行くとか、ご飯を食べるとかも全部、そのためのネタ」だと古市も言う³²⁾。

大学生のサークル所属率が上昇しているといわれるが、これもまた若者のつながり志向の現れであろう。2002年に56.2%であったそれは、2015年には70.6%にまでなっているのである³³⁾。この10年あまりで15%近く上昇した計算である。

結語—人間関係を濃密化させる若者たち

以上のように、現代の若者は豊かな社会に身を置いているとはいえ、彼ら彼女らを取り巻く環境は決して良いとは言えず、むしろそれは若者たちに暗い影を落としているのだが、それでも若者たちは現在の生活には満足しているものであり、それは「家族、恋人、友人」など、人とのつながりからもたらされるものであった。人とのつながりが精神的豊かさを用意するものであった。

若者に関しては友人関係の希薄化が従前から指摘されていたが、データはそれを示していない。むしろ浅野智彦が指摘するように、現代の若者の人間関係は「希薄化というよりも逆にある種の濃密化であると考えた方が良いように思われる」³⁴⁾。関係の深浅に合わせ、それを壊さないだけの能力が今の若者に求められているのもそのためである。今若者たちは人間関係を希薄化させているどころか、どの世代よりも関係に敏感で繊細になっているのである。「最近の若者は傷つきやすくなっている」とか「ひ弱だ」とするのはまさにその反映である。「その内部で」は「独特の繊細な感受性を育てている」のである³⁵⁾。本稿が取り上げた各種データはそのような若者の強いつながり志向を示していた。

- 1) 井田正道『世論調査を読む』丸善出版、2013年153-154頁。
- 2) 内閣府が2013年に実施した『我が国と諸外国の若者の意識に関する調査』である。
日本、アメリカ、イギリス、スウェーデン、フランス、ドイツ、韓国の13歳から29歳までの若者を対象に、共通の設問を用いて実施された。
- 3) 永井暁子「友だちの存在と家族の期待」、玄田有史編著『希望学』、99-100頁。
- 4) 浅野智彦『検証・若者の変貌』勁草書房、2006年、13頁。本書が例示する以下の希薄化見解も浅野の同書による。
- 5) 大平健『やさしさの精神病理』岩波新書、1995年、71頁。
- 6) 正高信男『ケータイを持ったサル—「人間らしさ」の崩壊』中央公論新社、2003年、119頁。
- 7) 小原信『iモード社会の「われとわれわれ」』中央公論社、2002年、28-29頁。
- 8) 小原、同上、226頁。
- 9) 久世敏雄『現代青年の心理と病理』福村出版、1994年、113-117頁。
- 10) 諸井克英、和田実、中村雅彦『親しさが伝わるコミュニケーション—出会い・深まり・別れ』金子書房、1999年、189-215頁。
- 11) 菊池章夫・斉藤耕二編『ハンドブック社会化の心理学—人間形成と社会と文化』川島書店、1990年、283-296頁。

- 12) 齊藤誠一編『青年期の人間関係 人間関係の発達の心理学 4』培風館、1996年、19-54頁。
- 13) 藤村正之、浅野智彦、羽瀧一代編『現代若者の幸福』恒星社厚生閣、2016年、82頁。
- 14) 水野博介・辻大介「若者の意識と情報コミュニケーション行動にカンする実証研究(1)」『埼玉大学紀要』32-2、1996年、辻大介「若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア」、橋本良明・船津衛編『子供・青少年とコミュニケーション』北樹出版、1999年。
- 15) 鈴木賢志『日本の若者はなぜ希望を持ってないのか』草思社、150頁。
- 16) 鈴木、同上、151-152頁。
- 17) 鈴木、同、153-157。
- 18) 大平、同上『やさしさの精神病理』、158頁。浅野、前掲『検証・若者の変貌』242-243頁参照。
- 19) <https://dentsu-ho.com/articles/1874>
- 20) 電通若者研究部編、同上『若者離れ』、117頁。
- 21) 同『若者離れ』、118頁。
- 22) <https://dentsu-ho.com/articles/1874>
- 23) 『プレジデント』、2010年9月13号、36頁。
- 24) <https://dentsu-ho.com/articles/1874>
- 25) <https://dentsu-ho.com/articles/1774>
- 26) <https://dentsu-ho.com/articles/1720>
- 27) <https://dentsu-ho.com/articles/1774>
- 28) <https://dentsu-ho.com/articles/1720>
- 29) <https://dentsu-ho.com/articles/3071>
- 30) <https://dentsu-ho.com/articles/1467>
- 31) <https://dentsu-ho.com/articles/619>
- 32) <https://dentsu-ho.com/articles/619>
- 33) 電通若者研究部編、同上『若者離れ』、240頁。
- 34) 浅野、同上『検証・若者の変貌』、235頁。
- 35) 同、235-236頁。